

馬居政幸著

『少子時代の親子の世界』

第三文明社、1997年

望月重信（明治学院大学）

不思議な本である。とてもためになる本である。あれも考えなければ、これも考えなければ、という気持ちにさせてくれる本である。

筆者は、気鋭の教育社会学者である。ところが親向け（とくに母親）で平易な文体で書かれていて学者の文体とは思えない。しかも呼びかけと訴えかけの口調なためついつい「立ち止まって」しまう。

本書は教育変動の中で子どもの問題がクローズアップされているが、ハウトゥーではない。また、専門用語を使わないで帰納法を駆使している。背景となっている筆者の社会認識は、ひとことでいえば「少子時代」である。それが子育て困難な社会を象徴しているという。だからといって理想的な子育ての方法を説いていない。筆者はいう。子育てに模範回答はない。子育ては子捨てである。

この言説は教育（社会）学の専門用語を使って子どもの現実をくもらせてしまいかねない学界言説を批判しているようにも思える。本書は一貫して型破りな調子で書かれている。

たとえば次の指摘は常識を破ったものだ。

「お子さんの未来を信じてあげてください。少なくともマンガを夢中で読むこと自体は、全く心配ありません。むしろ、マンガに興味を示さずに勉強ばかりしている子どものほうが問題だ」（21頁）。

また、筆者は独自のマンガ雑誌観をもっている。マンガを殆ど読まない評者にも、「少年ジャンプが親子のコミュニケーションツールの役割を果たしている」と筆者が述べるとき、少年ジャンプを手にしたくなる。

本書には今日の教育問題をとらえる枠組みが提起されている。たとえば「ジェンダー問題」。マンガとは「男女の性差を超えて一人の人間としての子どもが大人になるときに何が必要なのかを教えてくれる教科書」（80頁）という指摘がそうだ。自立の問題である。

そして「学校化社会」を示唆する言説に次がある。「地域社会がなくなり、子どもに日常生活の隅々まで学校が入り込んでしまった社会」（81頁）というように。

さて、本書は「親の覚悟」を決めてくれる本である。「この子は自分の子どもではなくなるんだ」（68頁）という自覚。学校信仰から離れられない親に対しては「学校の世界が広がれば広がるほど、子どもは一人の男もしくは女として自立するための世界を失う危険性がある」（71頁）という認識。

私たち読者は「なぜだろう？」と思わずにはいられない。答えはこうだ。

今の社会は子どもを自立させない方向で動いている。「子どもの世界が学校中心になり、それ以外の世界が学校の影響下にはいつているからだ」（75頁）という。

本書で筆者の学校観を探ってみよう。それは決して楽観的ではない。「学校は知識を具体的な経験を通じて子どもたちに身につけさせることはできない」(84頁) というのである。それでは具体的な経験はどのようにしてつかめるか。

遊びをとおしてである。遊びは「私的」である以上、親の目からも、教師の目からも離れた子どもたち自身の世界であることが重要な条件なのである。もちろんそれは「相手のある世界」「自分ではなくお客の都合が優先される世界、時間も場所も流動的」な世界である。

ところで本書の構成は二部である。「少子化」を厳然たる事実であることから出発して子育ての方途を見出そうというのが第一部。第二部では、筆書自身の子育て体験にもとづいて親(父親)が学ぶ様子が窺われる。

一、二紹介しよう。子どもを一つのモノサシで評価していないか。その子にふさわしいモノサシが視えなくなっていないか。そこで、このモノサシを親はいかに捨てるかが課題である。

そしてモノサシを捨てることで子どもを一人の人間として扱えるようになる。子どもは自立の道を歩むことができる。

本書を通じて私たち読者に強烈なインパクトを与える指摘のひとつに次がある。

「子どもが成長するということは『親が描く子ども像を次々と破って、そこからはみ出ていく』という冷厳な認識」(114頁)をもつことである。

この指摘に「教育における弁証法」を読みとることができる。

今日、子育ての雑誌や本、講座、講演会に私たちは自由に接することができ、マスコミが創った理想の子ども像を追求して止まない親がたくさんいる。そんな親に冷水を浴びせ学問や道徳に媚びない筆書の鋭い切り口は爽やかである。

グレン・H・エルダー、ジョン・モデル、ロス・D・パーク編
本田時雄監訳

『時間と空間の中の子どもたち』

金子書房、1997年

麻生 武(奈良女子大学)

この書物は、ある夢がついに成し遂げられたことを示す、歴史的なモニュメントとなる書物である。1983年秋、編者の一人であるエルダーが発達研究と社会史の研究を融合させて子どもを研究するという計画を提唱した。そこから、発達心理学者と歴史学者とが同一の場に集い、いくつかのテーマを巡って学際的な共同研究を行うという夢のようなプロジェクトが現実に誕生したのである。この「時間と空間の中の子どもたち」という書物は、その10年近くにもおよんだ画期的な共同研究の成果をまとめたものである。

この書物の中には、第二次世界大戦下のアメリカの銃後の子どもたちの研究がある。戦争のため父親や兄がいなかったということの影響は、実に複雑であり、一般化することは困難